

陳淳
ちんじゅん
(1483~1544年)



梅図扇面・冊

台北故宮博物館蔵

気品のある、清々しい着色された紅梅図。
(自題) 玉蕊衝寒故意開、天葩更解入林来。幽人自得清冷趣、手捲疎簾覆一杯。 道復



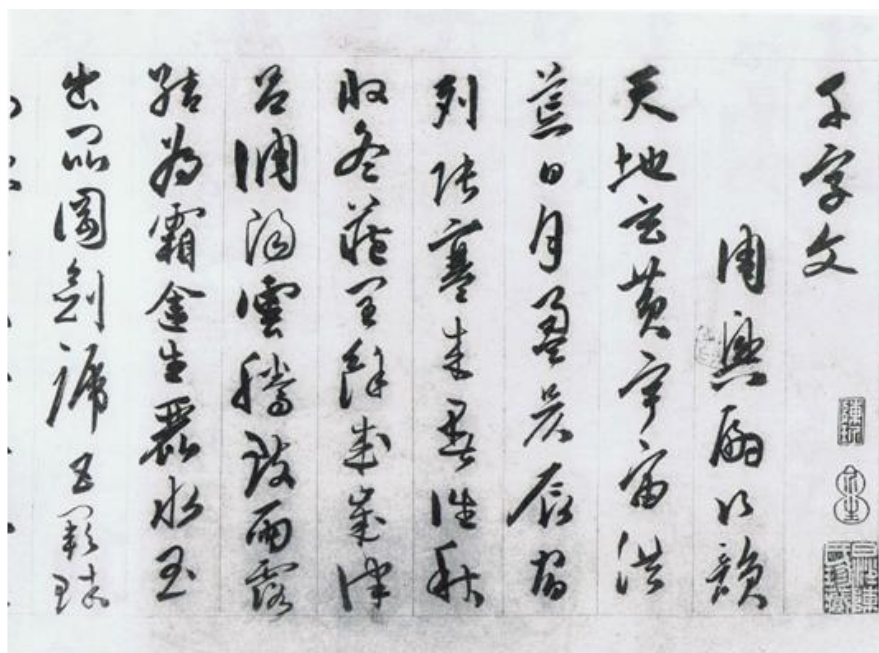
写生卷 牡丹図の部分

台北故宮博物館蔵

1538年56歳の作。巻には水墨写意で牡丹、蘭、竹、水仙、椿などが描かれている。陳淳特有の画風である。

草書千字文 嘉靖十四年(1535年) 紙本 縦約27cm 53歳

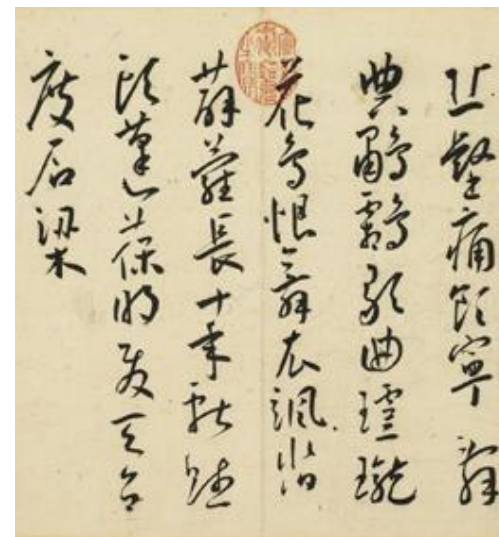
師の文徵明や祝允明より筆力が強く覇気がある。楷書は文徵明の影響が大きいと言われているが、行草書では自由奔放で、米芾や楊凝式の影響を受けたなどと言われている。



冒頭部分 東京国立博物館蔵

陳淳は呉派の書画家で蘇州の人。字は道復、別字を復甫。号は白陽山人。文人一家に生まれ、幼少から学問、詩文、書法に親しんだ。文徵明の学問、芸術の弟子で詩文書画すべてに秀でていた。(文徵明の門人を「文派」という) また沈周にも心酔しその技を学んだ。陳淳は美しい墨調の花鳥画の名手で、花鳥画に新たな境地を切り開き、徐渭と共に「青藤、白陽」と称され、明代文人画の写意花鳥派を代表する画家であるが、山水画も得意で、そのほとんどが江南の風景であるが、それらを自由奔放に描いている。沈周、文徵明の水墨写生を基礎に、元の四大家などの様々な技法を取り入れ個性的な写意水墨画を生み出した。書は画ほど伝わっていない。はじめ文徵明、米芾の影響を受け、晩年は楊凝式を好んだといわれる。草隸、行書、草書が巧みであった。草書は穏やかな書風のものから激しく力強い狂草作品まである。

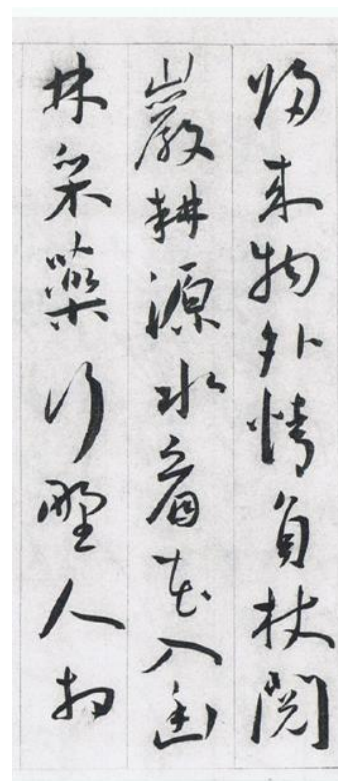
王寵（1494～1533年） 吳派 文徵明の後継者。蘇州の人。字は履仁、後に履吉。号は雅宜山人。



書雜詩冊部分 35歳頃？
この冊には計6首の七言律詩が収録されている。ほとんどが独草体である。明快ですっきりとし、硬質な筆遣いに見えるのは、用紙が質感の硬い金粟山藏経紙であるからか？転折部には丸みがあり、収筆に反捺筆が多い。力強く、素早い、変化のある筆法。

部分の部分

宋之問詩（そうしもんし） 嘉靖八年（1529） 紙本 縦24.4cm 35歳



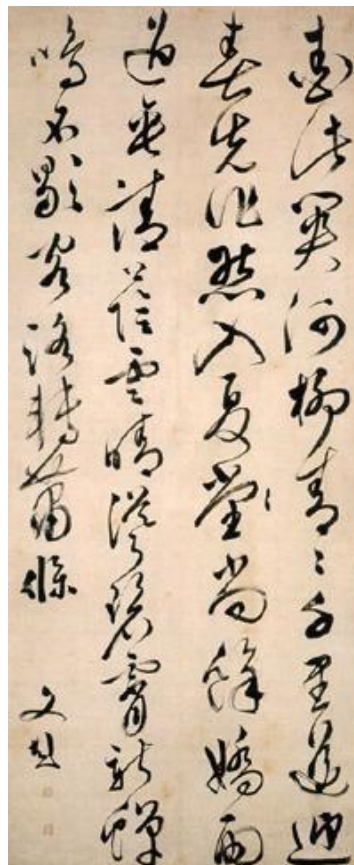
唐の詩人宋之問の五言律詩を烏絲欄をひいた金粟山藏経紙に書いている。 歸來物外情 負杖閑巖耕 源水看花入 幽林采藥行 野人相・・

部分

王寵は文徵明の弟子。徵明は王寵の文芸の才能を愛し自分の後継者ととめていた。 病弱で、早世した王寵の墓誌銘は文徵明により撰文、書丹された。 王寵は師と同じように高潔な人柄であった。 科挙に八度失敗して官には就かず、湖のほとりに住み、世俗をのがれて讀書し学問を修めた。詩文書画篆刻に優れていた。詩文は『雅宜山人集』十巻がある。 書は晋唐人にせまろうとしたとか、鍾繇を学んだとか、虞世南、智永の楷書を学び、二王の行書、孫過庭の草書などを学んだとか言われるが、その影響は見られない。 行草書は我流と思われるが、適逸で味わい深い。

ぶんぽう

文彭（1498～1573年） 吳派 文徵明の長男 蘇州の人。



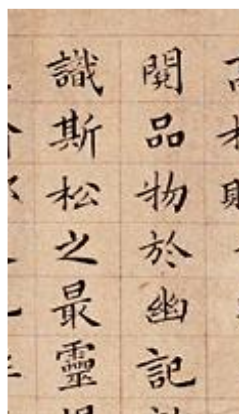
草書五律詩 軸 上海博物館蔵

文彭 字は寿承。

号は三橋、三橋居士、漁陽子。 文国博とも称された。 書画家で篆刻家。 篆刻に優れた業績を残し、近代篆刻の祖といわれる。 秦漢の印への復古を唱えた。



高松賦 楷書 紙本 26.7×44.4cm



部分 楷書は文徵明の書風そのままである

書は家学である文徵明の書を学んだのは当然だが、五体に優れ、王羲之、懷素、孫過庭などを学んだと伝えられ、晩年には行草書に独自の書風を創造したといわれる。 門下に後に篆刻の一派をなした何震がいる。



蒼崖



查舜佐氏
側款 長卿



雲中白鶴



查允揆印
側款 丁酉仲夏作
此奉別 何震長卿

何震^{かしん}
(1541?~1607年)



文彭之印



文彭之印



琴松玩鶴と側款

篆刻

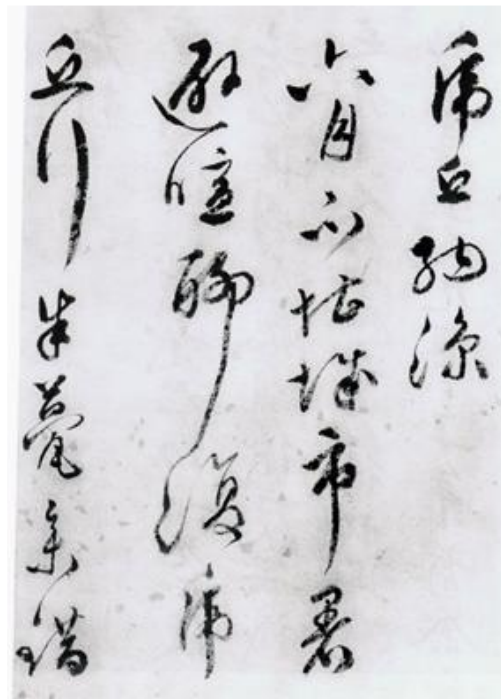


扇面 草書



墨蘭

文彭は墨蘭画が得意であった。



詩卷 部分 紙本 縦 28 cm 東京書道博物館蔵

詩卷は嘉靖四十一年(1562) 64歳の作。

文彭自作の七言律詩を十首ほど草書で書いた巻子。

「虎丘納涼

六月不堪城市暑

避喧聊復虎丘行

朱甍參錯・・・」

虎丘は蘇州の名所。

文徵明の行草からはみ出して、祝允明や懷素や孫過庭の影響がみられる。

文彭は近代篆刻の祖といわれる。篆刻は職人の仕事であったが、文彭が青田石に自ら刻印してから、篆刻は芸術の域に高められた。文彭らにより印篆や刀法、側款が発展し、文人による篆刻が盛んになった。文彭は秦漢の古印を模範とし、その作風は女性的な美しさがあるといわれている。

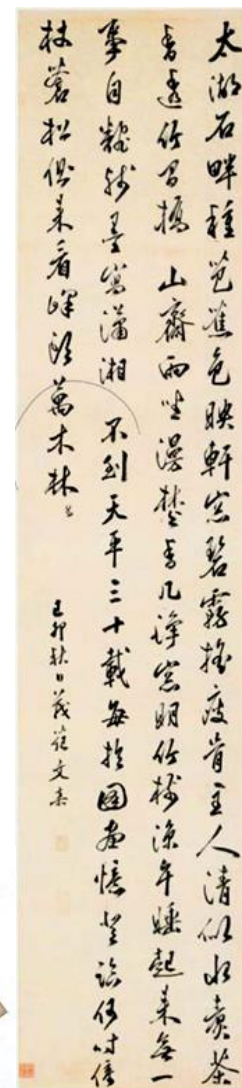
※青田石(花乳石)を発見したのは元代末の王冕(1310~1359年)といわれている。

何震 字は主臣。号は雪漁山人、長卿。文彭の弟子。篆刻に優れ文彭とともに「文何」と並称される。文彭を継承し篆刻を発展させ、のびやかで枯淡のある作風を確立し新安印派(徽派)の開祖となった。著書『統学古編』は吾丘衍の『学古編』とともに印学を学ぶ者のバイブルと言われる。

ぶんか
文嘉（1499～1583年） 呉派 文徵明の次男

字は休承、号は文水。書画家、書画の鑑定家。蘇州の人。山水画を得意とした。石刻は明代第一といわれる。文官。

太湖石畔種芭蕉、色映軒窓碧霧搖、瘦骨主人清似水、煮茶香透竹間橋。山齋雨坐漫焚香、几淨窓明竹樹涼。午睡起來無一事、自翻殘墨寫瀟湘。不到天平三十載、每於圖畫憶登臨。何時倚杖蒼松側、來看峰頭萬木林。己卯秋日茂苑文嘉



行書七絶詩軸 1579年
 79歳 約121×25cm 紙本
 北京故宮博物院藏
 七絶詩三首を書いている。



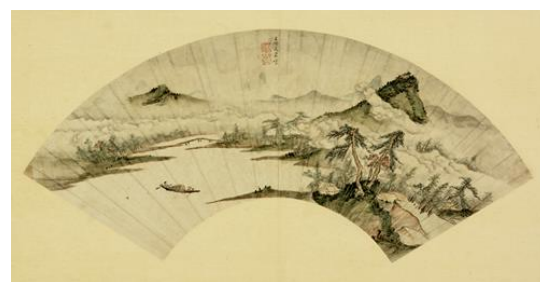
設色山水図 遼寧省博物館蔵

ぶんばくじん
文伯仁（1502～1575年） 呉派 文徵明の甥 画家。

字は徳承、号は五峰。蘇州の人。科挙をあきらめ画業を生業とした。中国各地を旅して、文派の画風を伝え、文徵明の画風をより精緻に発展させた。王蒙を研究して独自の画風を作り上げたといわれる。



松岡竹塢図軸 1564年
 132.6×30.7cm

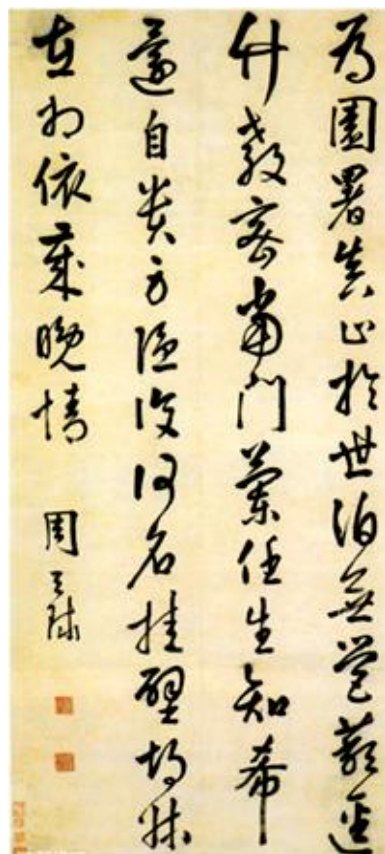


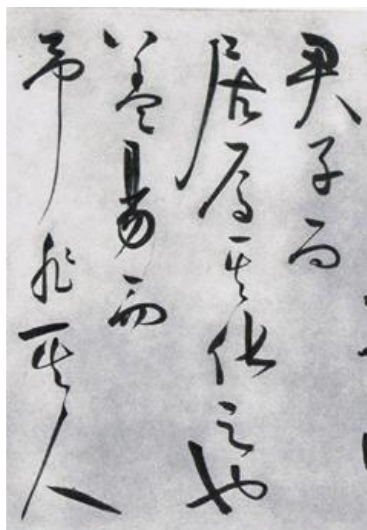
青溪放棹 18×55.3cm
 文派の画風で米氏の雲山図を新解釈して描いたもの。



行書扇面図

しゅうてんきゅう
周天球（1514～1595年） 呉派 文徵明の弟子 書画家。





何陋軒記 1508～1509年 紙本
縦約30cm 部分

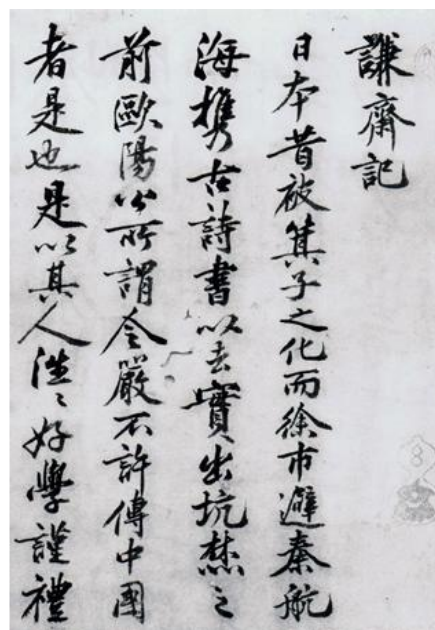
王守仁は35歳の頃貴州へ謫せられた。謫地は家もなく言葉も通じない僻地であったが、次第に土地の人たちと仲良くなり、土民の助けで家を建て、その家を何陋軒（かろうけん）と名づけた。この記はその建立のときの作である。若書きの書。

君子而居焉。其化之也蓋易。而予非其人也。

王守仁

字は伯安、号は陽明。
中国思想史の偉大な哲人。
明代の官学であった朱子学に対して陽明学という一派を開いた。
書は独特で鋭く遒勁で気迫がこもっている。

王守仁（1472～1528年）偉大な思想家。
おうしゅじん



謙齋記 部分 京都天龍寺妙智院蔵
嘉靖27年（1548）紙本 縦28.2cm

天龍寺の僧、策彦周良が入明したときに豊坊から書いてもらったもの。

「謙齋」（けんさい）とは策彦の号である。

豊坊（豊道生）

字は存禮、号は南禺。寧波の名門出身。郷試に首席合格し、続いて進士に合格したが、官歴は不遇であった。退職後、蘇州に隠れ住み名を道生、字を人翁と改めた。家の書庫の萬巻楼には多くの書の名品や蔵書があり、非常な勉強家であった豊坊には恵まれた環境であった。豊坊は俗界とは縁を断ち読書と書道だけに生きたといわれている。
著書に『書訣』などがある。

豊坊（？～1576年？）蘇州に隠れ住んだ変人。
ほうぼう



桃李園図 知恩院蔵

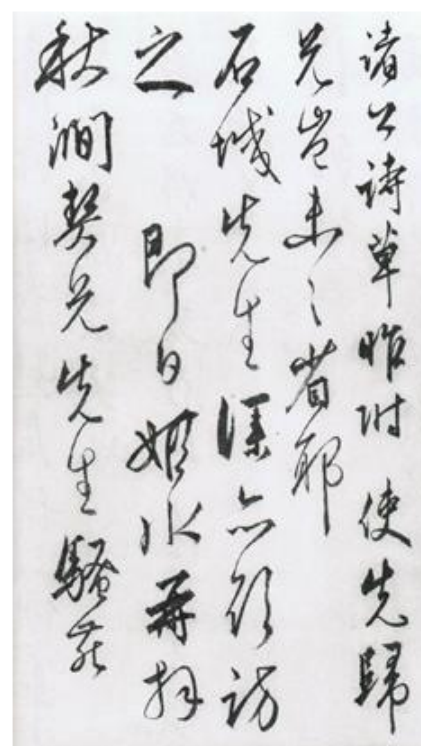
李白の「春夜宴桃李園序」に取材した作品。

桃李は兄弟姉妹の比喻か。

仇英

字は実父（実甫）、号は十洲。
江蘇省太倉の下層階級の出身で蘇州に移住し、漆工から身を起し、文徵明らと親しく交わり、彼らに高く評価された。
人物、山水画に優れるが、特に美人画に名声があり、美人風俗画の新しい様式を大成した。

仇英（1509？～1552年？）吳派 蘇州で活躍した天才画家。
きゅうえい



尺牘 紙本 26.8×16.4cm

秋澗宛の手紙。晋唐の古法の筆法で書かれている。

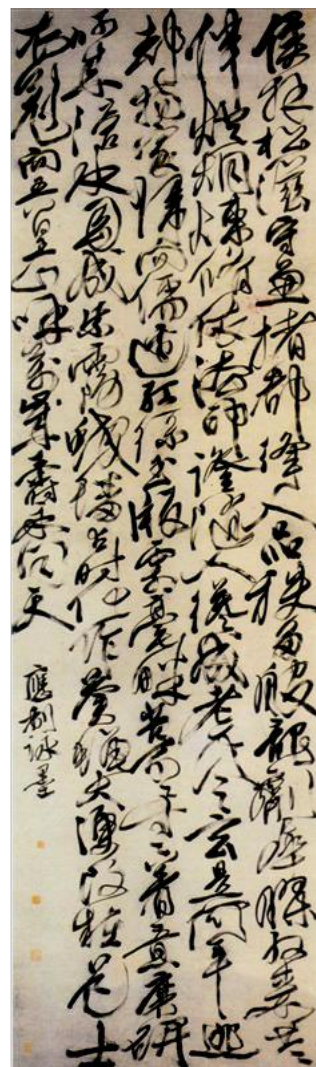
黄姬水

号は定靈子、質山。
一生官途にはつかなかったが、家が裕福であったので生活には困らなかったようだ。
文徵明や文嘉と親しく交わった。

黄姬水（1509～1574年）吳派 蘇州の人 祝允明の弟子で後継者。
こうきすい

じよい
徐渭（1521～1593年） 狂気の天才。字は文長。青藤老人、天池、田水月、天池漱生などと号した。

浙江省紹興府山陰県（今の紹興市）に生まれた。早熟で幼少から聡明であったが試験は苦手で、41歳まで郷試に8度落第した。詩文書画、戯作、小説などに天才ぶりを発揮し、剣術もよくでき、豪侠な性格であったらしい。紹興の名門の生まれだが、後妻の侍女の子として生まれた。父は生後百日で死に継母に育てられた。21歳で結婚し25歳のとき長男が生まれ、翌年妻が死んだ。私塾を開き生計をたてた。41歳再婚し42歳のとき次男が誕生。46歳の冬妻の不貞を疑い殺害、入獄7年。獄中で本格的に画の制作を始めた。貧困と孤独のうちに世を去った。



応制咏墨詞 蘇州博物館蔵
縦352×幅102cm 行草
気力が溢れ、剣術に通じる稲妻のような運筆。巨大な紙面だが構成に破綻がない。



七言律詩 軸 北京故宮博物館蔵
紙本 縦209.2×幅64.4cm 行草

応制咏墨詞 「応制詞」は皇帝から出された「御題」にしたがつて詞を作り献上された詞のことである。

この詞は、墨の製造の様子に事寄せて、王朝の統治を詠ったものらしい。筆線の変化に注目。巨大な紙面をものもしない生命力だ。

「侯拜松滋、守兼楮郡、絳人品秩多般。竜剤犀膠、収来共伴灯烟。煉修依法、印証随人、才成老氏之玄。是何年、逃却楊家、帰向儒边。紅絲玉版霜毫畔、苦分分寸寸、着意磨研。呵来滴水、幻成紫霧蛟蟠。有時化作蒼蠅大、便改妝道士衣冠。向吾皇山呼万歳、寿永同天。」

七言律詩

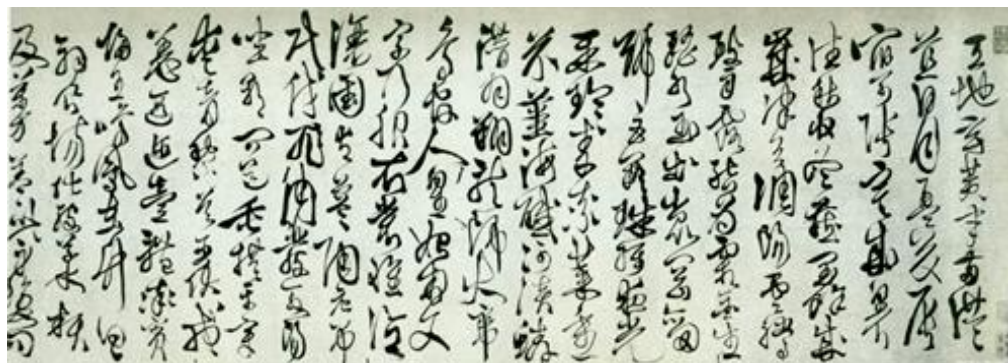
「春園細雨暮決決、韭葉當籬作意長。舊約隔年留話久、新蔬一束出泥香。梁塵已覺飛江燕、帽影時移亂海棠。醉後推敲應不免、只愁別駕惱郎當。」 醉守經海棠樹下、時夜禁慾盡、天池山人渭。」

（書についての徐渭の考え方）

徐渭は行草書が得意で自由奔放な書風を確立した。張旭・懷素の革新理論の影響を受け、書は気力がすべてであるという考え方で、書の技法も書体も無視して自由自在に書いている。

しかし、彼は書の技法も理論も専門的に窮めた人である。蘇軾・米芾・黄庭堅・文徵明などの宋元明の書を好み晋唐の書法は追究しなかつたようである。

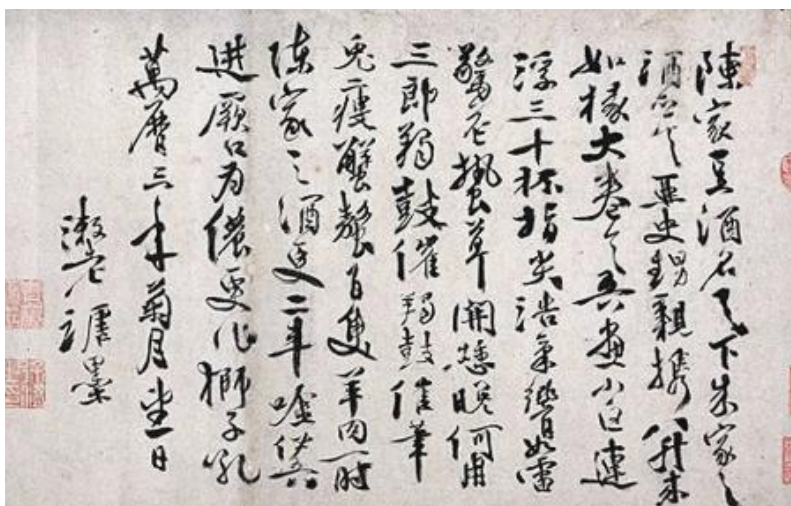
清代の八大山人や石濤や揚州八怪らに徐渭の書は大きな影響を与えた。



草書千字文卷 部分 紙本 31.2×495cm 北京榮宝齋蔵



花弁雜画卷 葡萄の部分 1575 年 紙本 縦 28.4 cm 東京国立博物館蔵



花弁雜画卷 部分跋

澆墨画法で使う紙は滲みにくい紙でないと効果はでないようである。すぐに墨が吸収されない紙が良いようだ。紙が適当なら、紙の上で墨の濃淡が交じり合い、生き生きとした自然な効果を發揮する。澆墨の効果には紙の質が大事だが、文人画家たちは墨に膠を混ぜたりして工夫したようである。



菊竹図 遼寧博物館蔵

徐渭や陳淳は澆墨技法の大家である。澆墨の技法は唐代の王墨にまでさかのぼれるらしい。紙の上に墨をまき散らし、偶然にできた濃淡の形を山や石や雲や水などに描きあげていく表現法である。混沌の中から物を形づくるといったところか。上の花弁雜画卷の葡萄の絵などはその例である。



竹図 アメリカ・フリーア美術館蔵

牧谿など宋・元の花弁画を模範とした。陳淳とともに写意画派の代表とされる。その画風は清代の画家たち（八大山人・石濤・鄭燮・趙之謙・吳昌碩・齊白石らの大家）に強い影響を与えた。徐渭は山水はあまり描かなかったが水墨の花弁雜画を好んで描き余白に題詩を書いている。『花弁雜画』は草花・果物・野菜などの静物をモチーフとする。この題材は、牧谿・沈周・陳淳・徐渭・八大山人・石濤・揚州八怪・海上派とつづいたジャンルである。

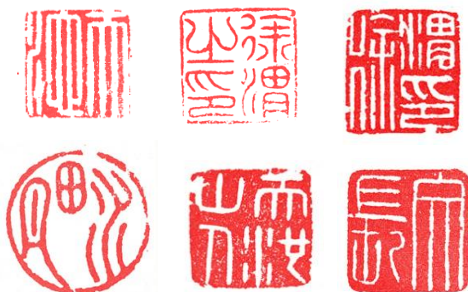
澆墨技法

徐渭や陳淳は澆墨技法の大家である。



青藤書屋

紹興市にある徐渭の旧居。
レンガと石造りの平屋2部屋の
庭園式民居。
書斎の前にある池は天池と呼ば
れ、ほとりに青い藤が植えられて
いる。庭に竹林、築山、曲がりく
ねった小道がある典型的な明代
文人の庭園である。



徐渭の落款印

落款印はたくさんあり、これらは一部
である。
上右から「徐渭印」「徐渭之印」「天池」
下右から「文長」「天池山人」「田水月」

徽州出身で倭寇討伐に功績を挙げた浙江総督の胡宗憲（1512～1565年）は徐渭の人生に大きな影響を与えた。
胡宗憲は嘉靖三十三年に浙江巡按御史となり、以後七年間倭寇討伐の指揮にあたる。
武術と軍略に長けた徐渭は、胡宗憲に誘われ戦いに参加し戦果をあげ、武芸だけでなくその文才も認められ私設秘書として迎えられた。そのうえ自宅を建築できるほどの褒賞をももらった。
しかし、頼りにしていた胡宗憲は嘉靖四十一年、政敵に弾劾され投獄され、嘉靖四十四年獄中で自殺（他殺？）して果てた。
胡宗憲という有力な後ろ盾を失い徐渭の生活は困窮した。徐渭はしだいに気が変になり自ら「墓誌銘」を書き自殺未遂をくりかえし、ついには妻を殺害し七年間入獄した。徐渭を助けようとして、減刑や釈放のため親身になって奔走した知人たちもいたのだが。
胡宗憲指揮下の幕僚には文徵明や明代最高の墨匠の羅小華らがいた。胡宗憲も徐渭らも当時の知識人階級の男子によく見られる任侠的な気質の持ち主であつたらしい。中国には俠気を重んじる伝統がある。



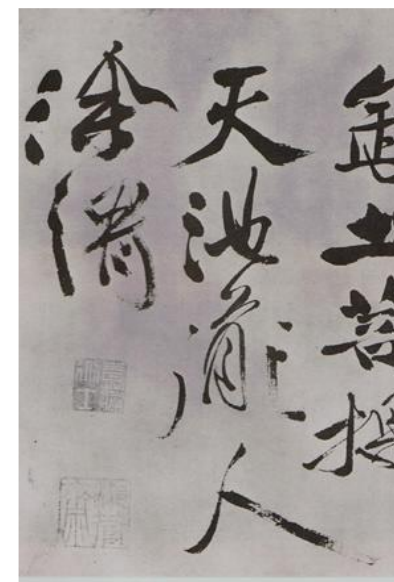
葡萄図

北京故宮博物院蔵



女芙館十詠 跋の部分 行楷書
紙本 29.8×446.8 cm 上海博物館蔵

右十詠。一為芙蓉。次芭蕉。玉簪。護藜。雞冠。
山查。野葡萄。土菩提。天池道人徐渭。



部分拡大

明墨

明代は造墨の最頂点といわれる。明末には墨づくりの名工が多く現れ、墨が鑑賞の対象ともなり墨譜などもつくられた。製墨業は主に歙県に発展した。歙県では、羅小華から程君房・方于魯にと継承された。程氏は『程氏墨苑』十二巻、方氏は『方氏墨譜』六巻を得意先に配布するカタログ（デザイン集）として制作した。『程氏墨苑』には、墨型の版画500図を精刻し、『方氏墨譜』は385図を載せている。新安の万端生は『墨海』十巻を刊行した。歴代の著名な製墨家の多くは同時に文学者であった。明代中頃までは松煙墨が主流であった。羅小華の独自の工夫で桐油煙墨が開発され、つづいて程君房、方于魯がこれを改良し、清代に至って油煙墨が主流になって行く。



方于魯 「桃都」裏
91×73×1.5 cm



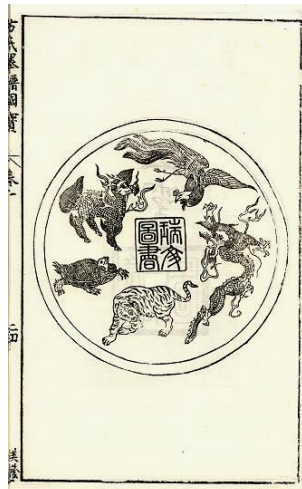
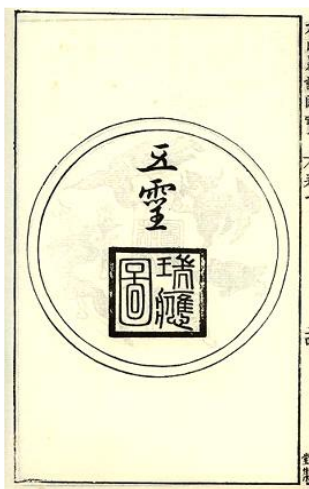
方氏墨譜



「程氏墨苑」より東岳泰山



生衣のたど号
程君房 「百子図」
直径 12.7 cm 高 1.9 cm



キリスト教のデザイン